翻刻　高松宮家蔵「六家集内註」

片山　享

解題

松永貞徳は「九六古新註」で「六家抄」注に関して、

是カラハ六家抄ノ哥也、右九代抄ノ註夢庵作カト堺衆ヘ相尋シニ、イサシラヌヨシ也、此六家ノ註本ハ夢庵ノ自註トテミセラレシガ、是モ夢庵ノ御作トオボヘヌ事ドモ侍レバ、憚ナガラ亦愚意ヲ書付侍ル

と述べて、九代抄注、六家抄注ともに夢庵（牡丹花肖柏）の注であることを否定している。ここに云う「六家ノ註本」は、「六家集抜書抄」[1]を指しているのであるが、これに関して貞徳の立言は正しいと思われる。

ところで、高松宮蔵「六家集内註」とある一本は、肖柏の自註を含む六家抄の注釈書として注目される。すなわち、巻頭七六首の注の後に「右歌の事もだしがたきまま愚推の分染筆候、其憚千万〳〵外見不可然耳　肖柏註之」と肖柏の識語を有するものである。

本書は、大判袋綴一冊、縦綿表紙で、左肩小短冊に題簽「六家集内註」とある。もっとも内題には「六家抄内註」とあって、この方が内容を正確に示していると云えよう。墨付七七枚、江戸中期写と思われる転写本で、誤写と思われる個所や和歌を欠脱した所もあり、巻軸注が途中で切れていて、完結した本文ではないが、「国書総目録」によると他に伝本を有さない孤本であって貴重である。本文歌頭に後人の注記と思われる「前にも註アリ」とか「奥ノ註ヨシ」などの小書注記がある。

和歌本文は「六家抄」によるが、所謂第一類本にない

哀にも夜半にすくなる時雨哉なれもや旅の空に出つる（長秋詠藻二六三）

の歌を含んでおり、所謂「六家抄」第三類本の本文を有する。

さて、注はほゞ四群に大別される。表示すると次のごとくである。

	春						夏						秋					
	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄
第一群注	1			1	2	1					2	2	3	4	1		11	3
第二群注																		
第三群注																		
第四群注																		

計	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄	月清抄	拾玉抄	長秋抄	山家抄	拾遺愚抄	壬二抄
	冬						恋						雑					
76					2	4		1	1		5	7	2	6	3	3	6	5
93					27	20		3		1	5		4	2		1	2	6
158							15	26	7	6	41	63						
99							38		9	7	45							

すなわち、第一群（一～七六）は、「六家抄」の春・夏・秋・冬・恋・雑各部から全般にわたって歌を抄出して注を付しているが、その排列は、「六家抄」の各部各抄排列ではなく、例えば月清抄・拾玉抄などのごとく、各抄別に極めて各部歌を排列している。（長秋抄六首中終り二首は山家抄の歌）終りに肖柏識語がある。第二群（七七～一六九）は、冬・恋・雑部から抄出して注を付するが、これは「六家抄」排列と同じ各部各抄排列をとり、冬部歌六九首（ただし、壬二抄末に拾玉抄一首・拾遺愚抄二首を補遺の形で補入している）次に恋部歌九首、雑部歌一五首の抄出注がある。第三群（一七〇～三二七）は、恋部各抄の歌一五八首の注。第四群（三二八～四二六）は、拾玉・長秋・山家・拾遺愚抄各抄の恋歌九九首の注である。かくて第一群は各抄各部の全般を対象とし、第二群は冬部より雑部に至る、云わば「六家抄」後半を対象とし、第三・四群は恋部のみを対象とした抄出注であるわけである。

これら第一群～第四群には重出歌が極めて多いことが注目される。すなわち、第二群では八首が第一群と重複し、第三群では、第一群と重出する歌八首、第二群と重出する歌二首。第四群では、第一群と重出する歌三首、第二群と重出する歌二首、第三群と重出する歌四八首であって、特に第三群と第四群との重出歌が目立つが、全体として四二六首中実に七二首が重出しているのである。

その重出する歌の注の一端を掲げると、三群にわたって重出するものが二例ある。参考までに「六家集抜書抄」の注を付して掲げる。

○うらうへのいもに心そ際もなき夜がるゝことよひ身には夜がれて

＜第二群注＞

うらおもての事也、たゞ二人の事也、（一四八）

＜第三群注＞

うらおもての心也、又両人ノ事ともいへり、身によがれてとはどなたへも行ぬ心也、ての字すむ也（一九三）

＜第四群注＞

うらうへうらおもての有人を云、又二道なるをも云、いもい（ゝゝ）女也、女を二人男が持てあなたへゆかん、こなたへゆかんと思ふに、よがるゝと云心、夜がるゝことよひ身にはよがれてと云は、二人おとこは女によがれ、女又おとこに夜がるゝと云心也

＜六家集抜書抄＞

両人等思恋と云心也、うらうへとは裏表の心也、かた〳〵の人を契れは、かた〳〵の人が夜がるゝ、よがるれども我心のゆく程に身には夜がれて心はゆくともそれをひまもなきと也

この歌は「拾玉集」詠百首倭歌（文治三年十一月廿一日句題百首）中の「等思両人」の題の歌である。第二・三・四群注と次第に詳細

になっているが、各注は前注を見た上での注ではなく、全く別の注であって相互に関係はない。解釈としては第二群注が穏当であるが、やゝ説明不足であり、第四群注は誤解である。「六家集抜書抄」の「両人等思恋」としたのは「等思両人」題によるものであるが、解としては最も近いと云えよう。

○風つらきもとあらの小萩袖にみて更行夜半にをもる白露

∧第一群注∨

是もみや城野の本哥を用、萩の露のごとく袖にをもるさま也、初五文字心あるべし、折ふしの秋風のかなしきにや、又風をまつとよめるを袖の露をはらはぬをつらきとにや（四四）

∧第三群注∨

風つらきとは萩の露を吹ちらしたる心歟、本哥かぜを待ごとくいふをとれり、此本哥風を待といふは露が待にはあらず、こぼしさうなと也（二四二）

∧第四群注∨

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待ごと君をこそまて　是を本哥にしてよめり、おもるしら露泪の心也（三九三）

∧六家集抜書抄∨

更るまで人を待心也、つらきは人のつらき也、風が吹ば萩の露はこぼるゝが、わが袖の露はをもる也、右、

宮城野の本あらのこはぎ露を重み風を待ごと君をこそまて

これらの諸注は、初句「風つらき」に着目し、第一群肖柏注は「折ふしの風のかなしきにや、又風をまつとよめるを袖の露をはらはぬをつらきとにや」と述べて二つの解を示し、第三群注は「風つらきとは萩の露を吹ちらしたる心歟」と述べ、「抜書抄」注は「つらきは人のつらきと也」として上句と下句を対立する関係として捉えている。「つらき」はこの場合、無情だ、薄情だ、思いやりがないの意で「風つらきもとあらの小萩」は荒い風がまばらに生えた小萩を無情にも吹きあらして、その露をも吹き散らしている様であり、その点で第三群注が近いと云えよう。「抜書抄」に云う「つらきは人のつらき也」は、余情もしくは暗示としては云い得るが、「風つらき」は直接には「もとあらの小萩」にかかってゆく句であって適切な解とは云い難い。この歌の注としては、既に「正徹物語」に、

萩の咲き乱れたる庭を詠めつゝ人を待ちゐれば、風あらく本あらの小萩に吹きて、露もくだけ落つるに、袖の涙も一つに見えて、月も更け行くまゝに、いとゞ袖の涙も置きまされば、をもく成りゐて、真萩の露とあらそひたる風情思ひやられて、待つ心深く聞ゆ、えんのはしへも出でて、詠めゐてこそあるらめとをしはからるゝ躰也、まことに心くるしく夜もすがら待ち居たるすがた艶にやさしき也

と極めて適切な注をつけている。(2) この正徹注に比すれば、「内註」の三注および「抜書抄」注は尚理解が浅いことを思わせるが、四注ともに本歌取を指摘し、連歌師達の新古今歌風理解の方法と態度を示しているということができよう。

かくて「六家集内註」の四群に分けられる各注は相互に直接的関係はなく、別人の注と考えられる。もっとも、全く関連はないとも云いきれない。例えば、

おしむべき花も紅葉もしらざりし嵐やいとふ冬の山がつ

此哥の下句冬の山がつとかける本あり、それはやすくきこゆべし（六一・第一群注）

おしむべき花も紅葉も知らざりし嵐やいとふ冬の山がつ（人イ）

此哥はむすび句冬の山人と有本あり、さあればきこえたり、月とあるは心いかゞと也、きこえぬ哥と也（一二八・第二群注）

とある歌は、おそらく下句が「嵐やいとふ冬のよの月」とある本文によっていたと思われる。それを第一群注・第二群注ともに「嵐やいとふ冬の山がつ」の一本によって訂正し、さらに第二群注は「山人イ」を付しているのであるが、第二群注に「月とあるは心いかゞと也」とあって本の本文を推察させる。実は「冬のよの月」というのは誤写であって、もとはと云えば「先年所抄出之一冊友弘令書写者也永正六年仲冬　日　夢庵(花押)」と肖柏の奥書を有する東大研究室甲本「六家集抄」の宗訊筆本の誤りによるものである。「六家集抄」はおそらく前歌

さびしさに柴おりくぶる煙だにくもればたてぬ冬のよの月

に誘発されて、この歌をも、

おしむべき花も紅葉もしらざりし嵐やいとふ冬のよの月

と誤写したものと思われるが、第一類本の高松宮家本「月清抄」やその系統本の名大図書館本「六家抜書」には「冬の山がつ」「冬の山賤」とあり、第二類本天理図書館「古六家集」慶応大学図書館本「月清抄」にも「冬の山がつ」となっているのであるが、「六家集抄」の誤書は第三類本にも流れ込んで天理図書館・竹柏園旧蔵本「月清抄」や大阪府立図書館・石崎文庫本「六家抄」などには「冬のよの月」となっていて、おそらくこの内註の本文は第三類本のこの系統本によったものと思われ、肖柏生存中に他本による本文訂正が行われたと思われ、第二群注に「月とあるは心いかゞと也」という表現によっても、それは第二群注作者の言というよりも、肖柏の言によったと思われるのである。第三群一七一注

みし人のねくたれがみの面影に涙かきやるさ夜の手枕

くもしすむ也、肖柏の伝也

というのも、第三群注作者の範囲を推察せしめるものがある。

かくて、右に述べてきた「六家集内註」における注のあり方、第

一群注が全般を対象とした注であり、第二群注が抄後半の部分注、第三・四群注が恋部のみの部分注であり、さらに重出歌の検証によって四群の注が別人の注であるという二点に着目して推論するならば、おそらく肖柏は「六家抄」に注をつけることを試み、全般から七六首を抜いて注をつけ、周辺連歌師もしくは門下を語らって注をつけさせた。肖柏の識語に「右歌の事もだしがたきまゝ愚推の分染筆候」とわざわざ「愚推の分」と断ったのも、この注が分担執筆であったことを示していると云えよう。

注（1）拙稿「肖柏の『六家抄』について」金子金治郎博士古稀記念論集編集委員会編「連歌と中世文芸」昭52・角川書店

（2）この歌の解釈・鑑賞については赤羽淑「定家の歌一首」（昭51・桜楓社）に精しい。

高松宮家蔵「六家集内註」翻刻に当たっては、次の方針によった。

1　漢字は若干の異体文字を除き、当用字体によった。

2　仮名遣は原本のままとした。

3　原本にある傍注や校異はそのまま記した。

4　歌頭に番号を付した。

5　原本には句頭点はないが、私意によってこれを加えた。

6　写真紙焼によったため、紙皺による判読不明の一個所があり、□で示した。

7　原本の誤写と思われる個所に（ママ）と記した。

8　原本の丁移りを示すため、各面終行に「記号をつけ、裏の面終行に丁数を記した。

貴重な資料の翻刻を御許可下さった高松宮家に深く感謝申し上げる。

翻刻　高松宮家蔵「六家集内註」

六家抄内註

月清　　摂政大政大臣

1花はみな霞のそこにうつもれて雲に色つくお初瀬の山
　はなの色うつろひて、雲の色付たるやうにみえる哉

2いとふ身も後のこよひと待れけり又こん秋は月もなかめし
　月に心のとまりていとふ身を忘るほとに、来秋は月をもなかめしと也

3をしなへておもひしことの数〳〵に猶色まさる秋の夕暮
　秋の夕は思ひのまさるとなり、何事おもひも一入」そふへくや

4袖の上はたゝ此比の露置て世をはうらみす秋そ悲しき
　此比の秋のかなしみのなみたは、大かたの世のうきにてはなしと也

5浪たてし心の道の末は又くるしき海の底にすむ哉
修ら道を題なり、海の底にありと云ゝ、浪たてしとは此世にての心よりと也
6はし姫の我をはまたぬさ蹇によそ旅ねの袖の秋風
はれを待らんといひしかと、其身にならて旅ねし」一たる秋風の袖哀なるへし
拾玉　慈鎮
7さてもいかに秋の哀をなくさむる心にも又今夜わかれぬ
九月尽の哥也、秋の哀もなくさめとなるへし
8衣うつ音をさそはぬ風たにも秋ふく色はうたゝねの夢
秋風にうたゝねの夢の覚たるさま也、擣衣の音ならね共夢をさましたるをうしとにや
9世の中の人の心を思ふ空にはかに月の雲かくれ行
此哥たしかならす、人の心の明ならぬを思ふにや」
10清見かた月すむ夜半はふしのねの絶ぬ煙も心して立
清見にて晴たる月に冨士を望て、風の晴たるをも秋の感にをとらぬとにや
11心こそ行ゑも知らね三輪の山杉の木すゑの夕暮の空
尋恋の哥也、三わの山杉は人を尋るしるしによめり、行ゑもしらぬとは、心の頼む方もなきさまなるへし
12なけかすは心もなきに成ぬへし思ふはくるしこはいかにせん
何事も分別せすは曲なかるへし、又思惟苦」二労も詮なし、いかゝせんと也
13君ゆへにしのく浪ちを立帰りみぬもろこしの物語せよ
遣唐使餞之題也、勅使にて渡唐の人にいふ心也
14衣をは竹の末葉にかけ置てとらに身なけし人をしそ思ふ
尺尊因位の事也、うへたる虎に身をあたへ給ひし時、其しるしに衣を竹にかけてとゝめ給しと也
15世中のよの中にてもあるならはくやしかるへし住吉の神」
分別しかたき哥也
16馴〳〵て泪の雨やくもるらん帰る空なきわしのみ山路
異山説法終て帰る時の感涙なるへし、心忘したる躰にや
17いかてなを霜すむほらにむまれてもなからん世まて君をまもらん
仙人と成ても君を伝へしと也
長秋　俊成
18心なき心もなをそつきはつる月さへすめる住よしの浜
住吉の浜たくひなき興に月さへすみて心もつき」三はつる斗也となり、心なきは卑下也
19哀けふみ法のすゑを聞こともゆつりをきけるしるし也けり
説法を聞て仏のたえぬ法を感する也

20いにしへはしつけき室に床たてゝ住し人をもあひみつる哉
　維摩会をよめるにや、彼居士のさま也
21すゝか山桐のふる木のまろ木はしこれもや琴の音にかよふらん
　琴にすゝかといふ名物あり、又桐は琴につくる木なれは執合てよめるなるへし
22つくり捨てあらしはてたるあらを田にさかりにさけるうらわかみ哉」
　此哥杜若をよめるとあり、うらわかみと云にや
23詠こそうき身のくせと成はてゝ夕暮ならぬ折もわかれね
　身のうきにはなかめかちなるへし
　山家　　西行
24万代を山田の原のあや杉に風しきたてゝ声よはふなり
　山万声をよはふと云事あり、聖代の儀也、山田の原伊勢也、あや杉はたゝ杉の事也、しきたてゝはしきりなるへし
25かしこまるしてに涙のかゝる哉又いつかはとおもふあはれに」四
　西行東国に思ひ立時、賀茂社にまいりての哥也、神前にして名残思ひ奉る也
26松山の浪に流てこし舟のやかてむなしく成にける哉
　崇徳院讃州にうつりまし〳〵て崩御の御事をかなしふ哥也、松山彼国ナリ

　拾遺　　定家
27誰と又雲のはたてに吹かよふ嵐のみねの花をうらみむ
　夕の花をよめり、此落花のうらみは更たくひなし、誰にてもかゝる恨はあらしなと云心にや、又ひとりなか」めておなし心なる人もなき心ともみゆ、如何
28ふみも見ぬいく野のよそに帰鴈かすむ浪まのまつとつたへよ
　文の音信もなき人に待とつたへよと鴈にいひたるにや、いく野の道のまたふみもみすの哥の詞を用たる歟
29夕暮はいつれの雲の名残とて花たちはなに風の吹らん
　此哥分明ならす
30卯花の枝もたはゝの露を見よとはれし道のむかしかたりは
　卯花隠道の題也、とはれしは昔になりたる道の」五さま也
31あちきにし(ママ)浮世はおなし世の中の秋はかきりに夜は更ぬとも
　九月尽の心也、秋は暮てもなをうき世はおなしかるへしと也
32月清みねられぬ夜しも唐こしの雲の夢までみる心ちして
　巫山神女楚襄王の夢にみえて、朝には雲と成暮には雨となりてはなれしと契りし事あり、さやうの事まて心にうかふとかや
33ひとりぬる山鳥の尾のしたり尾に霜置まよふ床の月影」
　山鳥の尾なかき事也、長夜の月のさま也、山鳥はひとりぬる也
34初瀬めのならす夕の山風も秋にはたへぬしつの小手巻

はつせの女なり、ならすは馴たる也、しつの小手巻はくり返心也、なれぬれ共秋は又悲しかるへきと也

35伊駒山嵐も秋の色にふく手そめのいとの夜そかなしき

秋のあらしの折は夜そかなしき也、手染の糸はよるといふ枕詞也、河内女か手染のいとゝよめり、いこまに便あり」六

36おも影は日も夕暮に立そひて野鳴によする秋のうら浪

野鳴かさきいもか面影とよみたる所に候へはさ様の心にや

37秋の月袖になれにし影なからぬるゝかほなる布引の滝

ぬるゝかほなる袖の月のことくなる布引とよめるにや

38雨おつる木の葉を何の哀とてなき心ちする心わくらん

雨木のはいかなるあはれにて閑なる心をうこかして分別の心いてくる所とみえ候」

39下むすふもしほの煙こかるとて秋やはみゆる人はうらみし

（ママ）

下にむせふ思ひは秋のかなしひもあらはれぬ物なれは、人の哀かけぬをもうらみしとにや、もしほは枕詞なるへし

40待程をかたらぬ月にかこつとも知らてやぬらん荒き浜へに

伊勢の荻あらき浜へにとよめる歌よりの心有へし、旅人を思ふ心也、故郷の人の待とも伝へぬ月をかこつに、其をもしらて旅人のねぬらんとなり」七

41夕霧にことゝひ佗ぬ角田川わか友舟もありやなしやと

伊勢物語のみやこ鳥の哥にてよめり、哥の心は明也

42風のまの本あらの萩の露なから幾世の春の松の白雪

雪中松樹低之題也、松にをもき雪を萩の露のをもきによせたり、本哥を用、いく世の春をとは松の雪のいつきゆへくもみえぬさま也

43むかしへやなに山姫の布さらす跡ふりまかへ積るはつ雪

古寺初雪題也、何山姫の布さらすらんと読」しは竜門寺にての哥也、其時雪の事伊勢集にありしにや、其むかしをしたふ心なるへし、此哥さま〳〵の儀なとありとかや、所好にしたかふへし（奥にも註あり）

44風つらきもとあらの小萩袖にみて更行夜半にをもる白露

是もみや城野の本哥を用、萩の露のことく袖にをもるさま也、初五文字心あるへし、折ふしの秋風のかなしきにや、又風をまつとよめるを袖の露をはらはぬをつらきとにや」八

45袖のうらかりにやとりし月草のぬれての後を猶や頼まん

名所也、袖と云斗也、やとりし月とは人にほのかに逢たりし事、月草のぬれての後とはうつろふと云心也、人のうつろふても猶や頼まむと也、ぬれての後はうつろひとも本哥也

46伊駒山いさむる嶺にゐる雲のうきて思ひは消日もなし

上句は序歌也、うきたる思ひの絶ぬ心也、いさむる峯とは雲な

かくしそとよめるは雪にいさめたる詞也、さてかくつゝきたり」

47ひたゝくみうつすみなはを心にて猶とにかくに君をこそ思へ

古歌に、とにかくに物はおもはすひたたくみうつすなわ(ママ)のたゝ一すちに　それを本哥にてたゝ一すちに思ふ人のうへに、猶又とにかくに思ふよし也

48色に出ていひなしほりそ桜戸のあけなからなる春の袂を

衣厭踐恋也、桜戸は明なからといはん枕言なり、あけとは五位の衣の色也、位あさきをいひなしほりそと也、春の除目にも位のおなし色なる衣を云り、右哥に玉くしけ二とせあはぬ君か」九身をありなからやはあはむとおもひし、これも五位にて春の除目にもれたる人の事也

49ほのかなる煙はたくふほともなしなれし雲井に立かくれ共

李夫人をよめり、返魂香にて影をみしははかなき事也

50紫の色ときまては知らさりきみよのはしめのあまの羽衣

むらさきは公卿の衣の色也、位たかきまてつかへんとは思はさりしと也、天のは衣とは五節の事也、其時まいりての歌にや」

51はからすよ世に畏明の月に出て二たひいそく烏の初こゑ

久しくつかへて前官なりしか、又任して畏鶏に出仕る心也、忠臣あしたを待と云

52しるらめやたゆたふ舟の浪まよりみゆる小嶋のもとの心を

海辺眺望の題也、浪まよりみゆる小嶋の浜ひさしの本哥也、知るらめやとは故郷の人旅行の心をしるにやとなるへし、久しく成ぬ君にあひみての心をしらせはやとにや、たゆたふ舟は其所の眺望なるへし」一〇

53つてにきく契りもつらし逢思ふ梢のをしのよな〳〵のこゑ

梢にねぬるをしのこゑをかんしたる也、つてに聞とは遠く聞心にや

54わたつ海によせては帰しき浪の初もはても知る人そなき

大海の浪のよするも帰るも間断なき物也、いつくより来いつくに帰ともしらぬ事なるへし、世上万事如此、無始無終不可説〻〻

壬二　　家隆卿

55桜色の霞のま袖露ををもみ恨ぬ山のやとの明ほの」

此哥はかりかたし

56夏虫をいとふはかりの煙にもあるれ(ママ)はふかし夕暮の空

かやり火の煙もあはれに見えたる心也

57たち花の花にもみましあたらよの月をへたつる五月雨の雲

橘にうつろふ月を五月雨の雲のたつねてかくすやうにみえたる也

58いこま山むら雨遠くいつる月雲もかくさぬ嵐ふくらし
雲なかくしそとよみたる 山なれ 共村雨の 月の嵐に 晴たるさま也」二
59乙女子か紅葉の衣打時雨袖ふる山の秋のみつかき
袖ふる山の紅葉にましるさまにや、本哥袖ふる山のみつかきとよめる所也
60かすか山おとろの道も中たえぬ身をうち橋の秋の夕暮
おとろの道とは大臣の事也、此作者の家末になりて官位中絶したる也、されは身をうしとよめり、秋の夕暮尤哀なり、春日山は藤原氏の心なるへし、宇治遠からぬ道也
61おしむへき花も紅葉もしらさりし嵐やいとふ冬の山かつ」
此哥の下句冬の山かつとかける本あり、それはやすくきこゆへし
62月もよし氷ふみ分たかしまの此川かみに宿はたつねん
此所此時の旅行のさまなるへし
63嵐吹遠山もとの村かしは誰か軒はより雪払ふらん
遠村の雪に嵐の吹さまを思ひやるにや
64夜をかさねしほつすか浦雪つもり山とす駒の跡やたえぬる
しほつすか浦近江名所也、哥の心不審なし
65入までに月は詠つ稲妻の光のまにも物思ふ身の」三
いなつまの光のまにも我やわするゝを本哥にとれり、片時もかなしきに終夜の思はいかはかりそとよめり、哀ふかし
66つくはねの山もあせねと吹風に人の心の隙そつれなき
つくはねはしけき山也、それさへあらき風なとはあせぬへきを、つらき人の心はさらにくつろく事もなしと也、ゆるふ隙もあれかしと也
67神なひのいはせの森のいはしたゝ我恋まさる鳥の音もうし
一二の句は序也、いはしたゝ也、恋まさる鳥の音とはよふこ鳥の事也、彼森によめり」
68暮野もちきりはかなき秋風に稲妻まねく花薄哉
いなつまを薄のまねくやうなるをはかなき契りとよめり、夕のおりふしのさま也
69海山としらぬ別の行ゑしれ月もあらしも心さそはゝ
行末もしらす別たる人にうかるゝ心の末を月も嵐もしるらんと也、わか心をさそひて行程にしるへしとにや
70心からわか身こす浪立帰恨てそふる八重のしほ風
古今わたつみのわか身こす浪を本哥也、人のかはりたるを浪こすといへり、それを立帰うら」三むる心也、八重のしほ風海辺の縁也
71あらち山やた野ゝあさち色付ぬ人の心のみねのあは雪

やた野にあさち色つく 新古今本哥也、色付ぬとは心のかはるよし也、あは雪は人の心のあは〳〵しき故と也

72をのか身にいかなる鳥の残すらん紅葉を払ふ冬の山風

鵆胡と云鳥は紅葉をおふと云へり、山風はなさけなくはらふとよめり

73さきたちし心もはては足引の山のあなたに消白雲」

山にいらんとあらましの心は身にさきたちて入しも其跡もなければ消白雲のことしとなるへし

74君かため蓬か嶋もよりつへし生薬とる住吉のうら

蓬萊山も君か世に帰すへしと也、海山も君によるとよめり、住吉に不死の薬をとるといふ事あるへし

75夕嵐うらわけ衣吹はらへもしほの煙袖にたなひく

うら分衣は山わけ衣なとおなし、煙を吹はらへ」一四と也、もしほの煙山にたなひくと云哥をもつて袖にとよめり

76いか斗みやこはたつみなかるらん月もうき世の興津舟人

後鳥羽院隠岐国におはします時の事也、彼国よりたつみなるへし、君の御事を思奉るなるへし

右歌の事もたしかたきまゝ愚推の分染筆候、其憚千万〳〵外見不可然耳　肖柏註之」

無窓月清抄冬

77春の花秋の月にも残りける心のはては雪のゆふ暮

春秋ノおもしろき事雪にも残りたると也、雪か面白事のはてと也

78誰をとひたれを待ましとはかりに跡絶はつる雪の山里

人を待てみん歟、人をとふへきかとする間に、雪のふかくなると也

79朝つまや遠の外山に出る日の氷をみかく志賀の浦浪

氷のうへに日のさしたる也、志賀の浦なみとは」一五たゝ浦まて也

80終夜かさなる雪の絶まより月をむかふる嶺の白雪

雪の夜もすからかさなりたる絶まより、雪のある所へ月のきら〳〵としたる也

慈鎮拾玉

81年をへて瀬〻の網代によるひをゝ哀とやみる宇治の橋姫

ひをとは氷にましりたるちいさき魚也、氷魚と書也

82宿しめてかひも有哉初時雨庭の木のはに音信て行」

山家の心なり

83ね覚する夜半のうつみ火かきのけてとふはいうらも憂身成けり

うき身也けりとははいにうらをとふもおもふやうになき心也

84袋ふるしつかかや屋の板ひさしうつゝの夢を残さましかは

寢にて夢の覚たるにくはんしてわかうつゝの夢をもさましたきと也、のこさましかはとはうき世の夢を見はてすともさましたきと也

85宵のまは庭の木のはにをとはして時雨になりぬ暁の空」一六

音はしてとは木のはの事也

86人こひぬひとの心やいかならんたゝ有かたき雪の空哉

雪には人を待も又思ひやるもかなしきほとに、恋せぬ人はいかゝと也

87今朝ならはたゝく嵐に明てまし誰かは今は我柴の戸を

誰かは今はとは夕の心なり

俊成長秋

88色〳〵の木の葉に道うつもれて名をさへたとる白川の関（本ノママ）

白きと云名をたとる也」

89哀にも夜半にすくなる時雨哉なれもや旅の空に出つる

たひの空にとは時雨の事也

90松風にやまと琴の音ひゝきあひて庭火の笛も空に澄也

かくらうたふ事、神楽には和琴をひく也、庭火とは爰にては神楽のうたひ物也、大内節会也

西行山家

91月を待たかねの雲は晴にけり心あるへきはつ時雨哉

心あるへきとは心あると云詞也、しくれの雲か心ありて晴たる也」一七

92さひしさは秋みし空に替りけり枯野を照す有明の月

かれのゝ月、秋より面白と也

93玉かけし花のかつらもおとろへて霜をいたゝく女郎花哉

玉とは露の心歟

94津の国の蘆の丸屋のさひしさは冬こそわきて問ふへかりけれ

蘆屋の里の事也

95枯野うつむ雪に心をしかすれはあたりのはらにきゝす立也

しらぬ哥と也、但奥ニ註在之

96瀬戸渡るたなゝし小舟心せよ霞みたれてしまきよこきる」

しまきとは風の事也

97昔思ふ庭にうき木をつみ置てみし世にも似ぬ歳の暮哉

隠遁しての歳暮の心也

定家拾遺愚草

98月はさえ音は木の葉にならはせてしのひに過る初時雨哉

ならはせてとは此ほとの木の葉にならひて、時雨をも木葉かと思ふ心也

99花薄草の袂も朽はてぬなれて別し秋をこふとて

草のたもとも薄の事也」一八

100 箸鷹の帰るしらふに霜をきてをのれさひしき小野の篠原
をのれははし鷹もさひしさうなと也
101 夢かとも里の名のみや残るらん雪も跡なきをのゝ浅茅生
雪ふみ分ての哥の心也
102 誰はかり山路を分てとひくらんまた夜はふかき雪のけしきに
たれそと云心也、所によりて詞つかひかはる也
103 そなれ松梢くたくる雪をれに岩うちやまぬ波のさひしさ
そなれ松磯になれたる松也
104 春知らぬたくひをとへはみかさ山此比深き雪のむもれ木」
述懐ノ事也、我身思ふ世にあはぬ心也
105 花山の跡を尋ぬる雪の色に年ふる道の光をそみる
俊成九十の賀を後鳥羽院よりめさるゝ時の哥也、花山の跡をとは花山の僧正の賀を君より御沙汰ありし例也、年ふる道とは俊成僧正ー哥道の事、雪の色とは雪のころの賀なれは也、又雪は跡といはん為なり
105 霜まよふ蓬か杣のかれしより雪けに似たる冬の水草
杣とはよもきのおほく高き所也、雪けは雪きえ」一九に似たると也
107 月のうへに雲もまかはてをく霜をあかす吹はらふ嶺のこからし（奥ニ注アリ）
108 山風の荒にし床をはらふ夜はうきてそ氷る袖の月影
うきて思ひの有世なりけりをとれり
109 風のまの本あらの萩の露なからいく世の春を松の白雪（前か注変也）
露をおもみ風を待ことゝいふ哥をとれり
110 天津かせ初雪しろしかさゝきのと渡る橋の有明の空
此かさゝきも空の事也
111 うつしける月のみかほは光あひて軒のあれまに積白雪」
月と雪とうつしひかりあひたる也
112 昔辺や何山姫の布さらす跡ふりまかへ積るはつ雪
此哥跡雲は古寺の雪と云題なれは、本哥の何山姫の布さらす寛とあるをとりたる哥なれは、寺に山姫か似合ぬほとに跡ふりまかへといはれたるよしあり、それはいかゝと也、まかへとは和哥の事書に雪のふる朝よめるとあれはその様にふれといふ心をまかへとよめると也」一〇
113 霜をかぬ南の海の浜ひさし久しく残る秋のしら菊
庭の残菊と云題也、さて浜ひさしとある居所の心地
114 嵐たにかことかましきみ山辺に霞ふるなり嶺の椎柴
かこつ心也
115 染し秋をくれぬと誰かいはた川又浪こゆる山姫の袖
又浪こゆるかと也、波に木の葉のうきてあるは山姫の袖のやうなると也

116時雨つるま屋の軒はのほとなきにやかてさし入月の影哉」
まやのほとなきはまやの軒のみしかきと月のやかてほとなく入とをかねたる詞なり、惣云あつまやとは四屋と書て四方へひさしのある家也、まやとは両下と書て二方へひさしのおりたるを云也、あつまやから又両方へおりをまやと云也

117明かたもまた遠山の木からしに猶吹ませなひく村雲
夜ふかき事也

118薄氷ゐるをし鴨の色〳〵に打出る浪の花そうつろふ」二二
色〳〵は鳥の色〳〵にあそふ心也、うつろふとは波のちる事なり、氷に鳥かあそふほとに浪かちる心也、面白哥也

119月の上に雲もまかはて置霜をあかす吹はらふ猶の木枯
月の上に霜のさやかにくもりもなく置たるを、猶あかすこからしか吹てさやかにする心也

120うつし(鄙ノ述懐也)けける月のさかほは光あひて軒の荒まにつもるしら雪
仏の事也、古寺の雪をよめる歌也、光あひては月と雪との事也」

121岩波のひゝきは念く旅の庵をしつかに過る冬のよの月
浪の音は旅をおこしておきよと云やうなるか、月のいつあくへき共なき心也

122苔ふかき岩屋の床の村時雨よそにきかはやありて浮世を
岩屋のしくれは音せぬ物にてよそにきく物なれは、世をいとひて此時雨をよそに聞はやと也、上句序也、世をいとひて岩屋にゐてと云心也
宗隆壬二抄

123秋の田にたてし僧つの姿まて霜にまかへる冬の山里」二三
さひしき歌也、山里と云所妙なり、僧つはかゝしの事也、昔ひえの山法師に玄濱(ママ)僧都と云人有りしか、可然人なれ共世を捨てある山かけにゐて田を守わさをして鹿ををひて有し人也、それよりかゝしを僧都と云也、又田の水口に竹の筒をして水をせき入れて水か一はいになれはこほれて石にあたりて鹿のおとろくやうにしたる物有り、今は是を僧都と云、是も彼玄濱(ママ)のしたると云説あり、さて僧都と云」といへり

124庵りさす野嶋か崎の浜風に薄をしなみ雪はふりきぬ
たひねしての心歟

125篠むすふ宿の戸ほそのさひしさを重てとつる夜半の雪哉
かさねては雪のふかく成心かかさなりたる心也

126あまのかる玉もの枕霜とちて我からさゆるかたしきの袖
われからは虫の事をよせたり、玉もと云にて藻にすむ虫の事也、上はわか心から旅をしてと云こゝろ也」二三

127さひしさに柴折くふる煙たにくもれはたてぬ冬のよの月

くもれはたてぬとは煙をたつれは月かくもるほとにえ柴をたかぬ也

128おしむへき花も紅葉も知らさりし嵐やいとふ冬の山かつ（人イ）

此哥はむすひ句冬の山人と有本あり、さあれはきこえたり、月とあるは心いかゝと也、きこえぬ哥と也

129しからきの外山の奥に声す也うつもれよはる槙の雪折

うつもれよはるは雪かうつみてま木かよはる也」

130みわの山杉の夕霜かき分ていかに待みる人をたつねん

本哥にいかに待みん年ふとも尋ぬる人もといひたる人をたつねんと也

131霜こほる柴のさ枝やうるふらん煙そしめる山の辺の里

うるふらんとはうるほふ心也、霜か消てうるほふこゝろ也

132高砂の尾上の鹿のなかぬ日も積りはてぬる松のしら雪

尾上に鹿のなきたるを聞て有りしか、鳴〳〵て久しく日数かつもりて雪になりたる心也」二四

133冬来ても秋の枯葉に露そをく時雨る空のかりの泪に

冬も秋かれたる草か残りて露か置と也

134尋てもいかにきかましさ夜千鳥かもの河原の有明のこゑ

此かもの川原の月に千鳥の鳴やうなる面白所をは尋てもえ聞ましきと也

135嵐吹遠山もとのむらかしわ誰か軒はより雪払ふらん

かしわの雪を嵐のはらふは人の払ふ様なるほとに、たか払ふそと也

136鵲のわたすやいつこ夕霜の雲るに白き嶺の梯」

137月わたる霜よのかりも白妙のつはさならふる鵲の橋

138夜をかさねしほつすか浦雪積り山こす駒の跡や絶ぬる

彼本哥あり

139出てくる衣手さむき河風におもひかねたるをしの一声

恋の心歟、そのゆくあたりにをしの鳴心也、さむきを思ひかねたる心歟

140白雲もひとつにさえて武蔵野の雪より遠は山のはもなし

むさし野はとをけれは雪と雲と末はひとつに見ゆるこゝろ也」二五

141里近く汀の氷音す也かはたれ時をたれわたるらん

かはたれ時は暁の事也

142かきりなく行かふ年のかよひ路や霜に朽せぬかさゝきの橋

かさゝきのはし是も空の事也、夢ノ伝には空をかさゝきのはしと云は、天の河にからすのわたるを云となり、それを空といはむためにかさゝきのはしと云へる歟、天川の事をいふとてかさゝきと云かと伝候也、是は此わたせる橋にをく霜のと云歌を此次ニ不審申時の儀なり、哥にはか様に」有ると也、野草といふ

題に浅茅原とはかりよめるたくひなり

143ね覚する夜半のうつみ火かきのけてとふはいうらも浮身成けり

はいにうらをとふも思ふやうになき心歟

拾遺愚草

144夢かさは野への千草の面影はほの〳〵なひく薄はかりや

ゆめかさてはなと云詞也

145さらぬたに霜かれはつる草の葉を（下句欠）

庭たゝき共云、石くなきの事也」二六

拾玉恋部

146わきもこにかきりしもせし大かたの恋とは人の情なりけり

女はかりにはかきるましきと也、わきもことは女の惣名なり、

爰にては我思ふ女の事也

147竜田山夜半にや君かひとりとてねしよの夢の行ゑをそしる

伊勢物語の哥をおもひて也

148うらうへのいもに心そ隙もなき夜かるゝ今宵身には夜かれて

うらおもての事也、たゝ二人の事也

山家」

149かゝる身に折ふしたてけんたらちねの親さへつらき恋もする哉

をしへたてたる事也

拾遺愚草

150尋つるつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

かひによせて也、おくの海は奥州也、心のおくといはむため

也、つらき人ノ心の奥を尋みれはいふかひもなしと也

151をのれのみあまのさかてをうつたへにふり敗木の葉跡たにもなし

伊勢語にあまのさかてと云と木のはふりしく」二七とをよめり

152かりそめの誰か名のりそになひく覧我身のかたはけたぬ煙を

名乗事を海草にそへたり、煙は思ひの煙也

153うき人を音にもきかし玉かつらたゆ共ふけな秋の山風

此玉かつらはたゆともいはんため斗也

154忘すやをのかさま〳〵年ふともうき身はよその知人にせよ

心はわすれたりともよそノ知人にせめてめされよとなり

月清」

155紫の庭の春風長閑にて花にかすめる雲のうへかな

大内の事也

156橘ひめの我をはまたぬさむしろによその旅ねの袖の秋かせ

是はうちはしのあたりにたひねしての哥也

157年へたるひはらの杣のさひしきにたつきの音のほのかなる哉

此たつきはをのゝ事也

158待人のなきにかくれる我身哉物思ふ秋のいり会の鐘

此入会をきゝて待人かあらむにはかなしかるへきを、待人のな

きによりて命かかゝりたると也」二八

拾玉

159人はしらしまことの道をおもふとてまことの道をよそにみる哉

心天台などの観法歟

160船の中に老にし人をおもふにも求てこそは猶えさりしか

心は唐に君の蓬萊へ薬をとりに童男郭女をつかはす、まことはなき所なれは舟の中にて老たり、此事白楽天かかふにも作、雲の波霞のなみなとゝいふは此事也、宗砌連歌にもあり」

長秋

161袖のうへの玉のひかりのほともなく南の空の月とすむらん

心は童女成仏なり、程なく成仏の心なり

拾遺愚草

162うたゝねに草引むすふ事もなしはかなや春の夢の枕や

草引むすふ事もせしと云本哥をとる也

163忍山こさちの奥にかふわしのその羽はかりや人にしらるゝ

こさちは名所也

壬二「二九

164をのか身にいかなる鳥の残すらん紅葉を払ふ冬の山かせ

心はしやこと云鳥は木の葉をきたる鳥也

165雲かゝるならの滝なみ風ふけは古き軒端に玉そ散ける

此躰也、浜の宮なとへ滝の落たる様也

166大方のみかたの海の名もつらし心を分て月を見るにも

みかたのうみ名所也、恋の哥也

167有明の月よ見し夜のしるへせよ人は心を興津しま山

恋の歌なり

168その山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こほれつゝ」

ちきりたる心也

169いか斗都はたつみなかむらん月も浮世の興津舟人

此哥は後鳥羽院隠岐国に御座の時の哥也、隠岐国よりみやこはたつみなり

月清

170み吉野の山よりふかき物やあると心にとへはこゝろ成けり

わか恋の心のふかき事也

171みし人のねくたれかみの面影に涙かきやるさ夜の手枕

くもしすむ也、肖柏の伝也」三〇

172君ゆへにいとふもかなし鏡のこゝやかて我世も更にし物を

あひたる夜かねをきゝていとふを、おもひかへして我世もやかて老になるへきとくわんしたる心也

173枕にも跡にも露の玉ちりてひとりおきゐるさ夜の中山

旅の恋なり、枕より跡よりを本歌也

174 かちをたえゆらのみなとにこく舟の便もしらぬ興津しほ風
かちのをかたえたると云人あり、たゝかちをもとられぬ心よし
175 せき返す袖に涙やあまるらん人も木すゑに秋そみえぬる」
わかなみたかあまりて秋の梢を染たるかと也
176 よそなからかけてそ思ふ玉かつらかつき山のみねの白雲
かけてとは思ひもすてすとふ心也
177 めくりあはむ限はいつとしらねとも月なへたてそよその浮雲
よその浮雲とは人のしやうけしたる事かと也、空ゆく月のを木
歌也
178 我とこそなかめなれにし山の端にそれもかたみのあり明の月
人にあふたる夜の月をわれとこそかたみにすれ、人はかたみに
せよとはいはぬをと也」三一
179 わすられて我身時雨の故郷にいかゝや物を軒の玉水
玉水の物いふやうにものをいひてうらみたきと也、本哥の玉水
つふ〳〵と云哥をとる
180 秋はてゝみ山はけしく吹嵐あらし今はのなけのことの葉
なけの言の葉とはなをさりの言のはも有ましきと也
181 泪せく袖に思ひや余るらんなかむる空に色かはるまて
袖の泪かあまりて空の色もあらぬ色になると也、此比の空にて
はなきと也」
182 わくらはの風の伝にもしらせはや思ひを須磨の暁の夢
おもひをするを風の伝にもしらせ度と也、須磨用はなき也、思
ふかたより風や吹らんなと便に歟
183 待わひぬ今夜もさてや山しなのこはたの嶺の遠の白雲
をちの白雲とはおもふ人の遠こと也
184 忘なん中〳〵またし待とても出にし跡は庭のよもきふ
別久成心なり
185 うれしさにあらぬ物故忍ふとて泪を袖につゝみつる哉
うれしさをなにゝつゝまんと云をとりて泪をつゝむ」三二となり
186 苦しさはおとらし物をあなかちにいとふ心もこふる心も
□と云心也
187 夕ま暮露をは袖の物にして我恋草に秋風そふく
恋くさとは恋の事也、物を思ふ時節かせか吹てかなしきと也、
草に風か吹は露はたまらぬ物なれと、袖は露にて有と也
188 はゝきゝのよそにのみやはとおもひつゝ幾夜ふせやに身をまかす
らん
ありとはみえてあはぬ君哉といふを心にこめて」身をまかす寛
とはたゝねたる事也
189 時しもあれすみた川原の都鳥むかしの人の心しれとや
わか思ふ人はありやなしやといふ心也

190 筥麿の恋（奥ノ注恋也）てふことをよそにみし老のなみこそ立帰りけれ
老後初恋と云題也
191 人しれす尋てそ行いもせ川恋わたるへき橋はありやと
恋わたるへきとはたゝわたるへきと云心也
192 故郷（奥ノ注ヨシ）にかたしく袖も露けきにこよひいつくの旅ねするらん
旅をおもふ心なり」三三
193 うらうへのいもに心そ晾もなき夜かるゝこよひ身には夜かれて
うらおもての心也、又両人ノ事ともいへり、身によかれてとは
となたへも行ぬ心也、ての字すむ也
194 わしの山（奥ノ注ヨシ）の法の窟に問きかん恋わふる身にむくひ有やと
先の世のむくひにてあると也
519 恋しなむ後を思ふも哀なりなかむる空の行末の雲
行末の雲のやうに跡もなく我も成へきと也
196 打なかめ人待宿の呉竹に心みたるゝむらすゝめかな
心みたるゝとは恋をすれは何事にもみたるゝと也」
197 恋佗ぬ身は山のはにかくしてんこゝろよいかに夢の通ち
身をはかくしえたり共心のまよふへきをはいかゝすへきと也
198 君こふと人のきけかし寢ふるまかきの竹の音はかりたに
人と云も君の事也
199 暁の涙やせめてたくふらん袖に落くる鐘の音哉
せめてとは切にと也、たくふとはその泪にかねかたくへてと也
200 東路の夜半のなかめをかたらなん都の山にかゝる月影」三四
旅の恋なり
201 人こふる我なかめよと思ひけり須磨の関屋の有明の月
須磨の月の心に我をなかめよとおもふかと也、詠めてなくさめ
とも又物をおもへともなくたゝ須磨に月似合たる物也
202 おもひかぬるよはの袂に風更てなみたの川に千鳥鳴也
千鳥なく也とは物をおもふ時節そこもとに鳴心なり、おもひか
ねいもかりの本哥也、此心にて人の所にて行道ノあたりになく
千鳥歟」
203 その人とわきて待らんつまよりもあはれはふかき波のうへ哉
遊女をよめる也、遊女と云題は水辺也、くはいらいはたゝ也、
昔遊女かくはいらいをしたると也、くはいらいはさるかく又は
てんかくのたくひ也
204 思ひねの夢をかたしく床までも猶うらめしき鐘の音哉
むかしあふて今はひとりねたる心也
205 なをさりにたゝ引うへししの薄秋より後も露ふかきまて
ひきうへしとはそとあふたる心也、あかれて後もふかく忍心な
り」三五
206 今はたゝ空たのめにもこりねとや待かね山の嶺の椎柴

椎柴はこると云より出たり、心は空たのめをして待かねて、それにてこりよと人かおもふかと也

207 玉札の跡たになしと詠つるゆふへの空にかり鳴わたる
帰て無背恋なとの心歟

208 なかめつる月は板まにもりそめて心の宿そ荒はしめぬる
心の宿そとは人の心かあれそめたると也

209 あるかなきか心の末そ哀なる二日の月に雲のかゝれる
初の恋の心なり、二日の月をあるかなきかの」やうにそと思ひ初て行末はなにとか成へきと云心也

210 かへるさの月そかなしきまとろまてやかて有明を詠しよりも
帰さの月とは人にあふてかへる夜の事也、やかて有明をとは人を待てねもいらてやかて有明になる夜のかなしさよりも、なをかへるさの月はかなしきと也
長秋

211 ちらは散れいはせの森の木からしにつたへやせまし思ふ言のは」
三六
世間人わか名も顕るとも、思ひかいひ度と也、いはせは言葉といふにえん也

212 奥山の岩かきぬまのうきぬなはふかき恋路になに乱るらん
うきぬなはとはうきたる沼のなわ也、なわとはなかきかつら草也、ぬとはぬまの事也、ねぬなわとはねをそへたる斗也、ねせりなと同前也、此ぬなわみたるゝ物也

213 いとふへきこはまほろしの世の中をあなあさましの恋のすさみや
恋のすさみとは只恋の事也、面白洞也」

214 うきにのみしつむみくりのくり返し下にみたれてやみぬへき哉
みくりとはきやうさんれうのなるつる也、是も水草也

215 おもひあまりそなたの空を詠むれは霞を分て春雨そふる
霞を分て、其時分也

216 年もへぬうちの橋姫君ならは哀も今はかけまし物を
本哥哀とは思ふ年のへぬれはといふをとる、本歌はうちの橋守を哀とこなたかおもふと有を、打かへして橋守か君ならは哀をかくへき物をと也」三七

217 誰となき空たき物の匂ひこそうきたる恋のしるへ成けれ
よその空たきをきゝての事也、さてたれとなきとなり
山家

218 けふこそは気色を人にしられぬれさてのみやと思ふ余に
人にはおもふひとの事也、初る洩恋ノ心歟

219 さらに又むすほゝれ行心哉とけなはとこそ思ひしかとも
逢たらはかなしかるましきと思ひたれは、あふて猶むすほゝるゝかと也」

220恨しと思ふ我さへつらき哉とはて過ぬる心つよさに
人の嫌面をおもふ我さへつれなきと也
221心さし有てのみやは人をとふ情はなとゝおもふはかりそ
情はなとゝは心さしはふかくなくとも情はかりにもなとかと也
222たのめぬに君くやと待宵のまのふけゆかてたゝ明なましかは（奥ノ注ヨリ恋也）
五文字きとく也、人を待は夜のなかきほとにふけなてやかて明
よかしと也、くへきとたのめたらはこぬまてもふくるかかなし
かるへきか、たのめす待」三八ほとに如此おもふと也
223物思へとかゝらぬ人も有物を哀なりける身の契り哉
恋をすれ共是ほとにはかなしからぬ人もあるへきに、我は悲し
きと也
拾遺愚草
224つらきさへ君か為にそなけかるゝむくひにかゝる恋もする哉
今君か我につらきはわか先世に君につらく有つるむくひにてあ
れは、かゝる人にわれらにて候事よ、無勿躰心也」
225君といへは落る泪にくらされて恋しつらしとわくかたもなし
けふして無分別と也
226乖ってん人の心もあやうさにふみたにもみぬあさむつのはし
人はつかひなとの事也、ふみたにもみぬ文の心あり
227あし垣の人め隙なきまちかさを分てつたふるまほろしもかな
まほろしとは夢ともまほろしとも分ぬ物也、ほうらいへ行たる
方士をまほろしと云も仙術を伝へて飛行自在なる物也、此哥は
方士は遠き蓬萊へ行たる者也、われは近き所にある人なれ共人
めの」三九隙なくていひよらぬを分ていひよるやうにまほろしも
かなといふ事妙なり
228忘ぬやさは忘けりわか心夢になせとそいひてわかれし（奥ノ注ヨリヨシ）
人かあひたるをは夢になして忘よといひたるを忘て、人を思ふ
ほとに忘ぬやと也、此忘ぬやと云は人を忘る事、さは忘けりと
は夢になせといひしをは忘れてえわすれぬと也
229時のまの袖の中にもまきるやとかよふ心に身をたくへはや
時のまとはそとの事也、まきるやとは死たきと」云心也、まき
るゝといふをしぬる事によめる哥おほし、死て思ふ人の袖の中
にやかて入度と也、木哥袖の中にや入にけん我玉しゐのなき心
ちするといふ心なり
230恋わひぬ花ちる嶺に宿からんかさねし袖やさてもまかふと
人に逢たる夜かさねたる歟、花かしろく散てまきるゝかと也、
又匂のまかふ心も有歟
231忘はや松風さむき波の上にけふ忍へともちきらぬ物を
遊女をよめる歟」四〇
232うくつらき人をいつこと尋てもなれしかことの有世なりせは

なれしかことはかこつへき事かあるにこそ、またなれたる事も
なきほとにかこつへき事もなし、尋ても無曲と也

233影きよき雲ゐの月を詠つゝさても経へき此世斗を
此世はかりとは此世は月を詠ても経ぬへきとなり、又恋故に後
の世かかなしきと也

234思ひねの夢にもいたく馴ぬれは忍ひもあへす物そ悲しき
夢をみてはかなしく成也、かなしくならする程」にえ忍ひあへ
ぬと也、堪忍しえぬ事也

235名取川いかにせんともまたしらす思へは人をうらみつる哉
あふたらは名か立へきと何の分別もなく人をおもへは先うらむ
ると也、後の名に立へき事も無覚悟と也、本哥の心をふくむへ
し

236更る夜を心ひとつに恨つゝ人待鴫のあまのもしほ火
もしほ火はその夜の更る時分也

237たれ故とさゝぬ旅ねのいほりたに都のかたは詠し物を
さゝぬは庵にえんも有へし、此心さゝぬ時たに」四一旅はかなし
きに今は都に思ふ人かあるほとにとなり

238二見かた伊勢の浜荻敷たへの衣手かれて夢もむすはす
是も旅の恋か、又たゝ恋にても有へしと也、敷たへは折敷てと
よめる所なれは也

239面影はをしへし宿に先立てこたへぬ風の松に吹こゑ
をしへしは思人あなたか宿にてあると云たる事、こたへぬは其
をしへたる人はこたへすして松風かこたゆるやうに吹と也、尋
恋ナリ」

240あちきなし誰もはかなき命もてたのめはけふの暮をたのめよ
たのめはけふのとは今日の暮にとへと也

241風つらきもとあらの小萩袖にみて更行夜半におもる白露
風つらきとは萩の露を吹ちらしたる心歟、本哥かせを待ことく
いふをとれり、此本哥風を待といふは露か待にはあらす、こほ
しさうなと也

242面影も別にかはる鐘の音にならひ悲しきしのゝめの空
別にかはるとはひとりねもあかつきになれは面影かきぬ〳〵の
心ちするならひとは逢夜のき」四二ぬ〳〵のならひに面影もきぬ
〳〵の心有と也

243知らさりし夜ふかき風の音も似す手枕うとき秋のこなたは
本哥にすきまのかせをいとひしもといふか、我あかれてのこな
たはすきまの風をいとふたる風の様にもなし、一向別の風にそ
ある、かやうにかはるへきとはしらさりしと也

244うらやますふすゐの床はやすくとも歟もかたみねぬも契を
やすくぬるもうら山しくもなし、我はねられすして歟かかたみ

にてあると也」

245昔きく君かてなれの琴ならは夢にしられて音にも立まし

いかにせんそ(なら同イ)の時にかも声しらむ人のひさのうへわかまくらせんことか、女(に)となりて人の夢にみえて哥をよめる事あり、そのやうに琴にてわか身かあらんには人の夢にも見えて歟へきと也、寄琴恋と云題也

246恋初し思ひのつまの色そ是身にしむ春の花の面影

思ひの妻はおもひの事也

247待人のこぬ夜のかけにおもなれて山のは出る月もうらめし」四三

影にとは袖の浦と云名所をよめり、猶や頓まんとはうつろふたり共猶たのむへきと也、月草のぬれてとはうつろふ心也

248ま木の葉のふかきをすての山に生る苔の下まて猶やうらみん

古哥にをすての山に槙をよめり

249けふそ思ふいかなる月日ふしのねの嶺に煙の立はしめけん

たゝ我思ひの煙をふしにたとへたり

250石はしる滝ある花を契にてさそはゝつらしはるの山風(奥ノ注忍也)

我ものにもならてうつろはゝかなしきと云心也」

251槙をける垣ねかくれの小篠原しられぬ恋はうきふしもなし

うきふしもなしとはまた人にあはぬほとにうきふしもなきと也、上の句しられぬと云へき序也

252名取川心のとはん官の葉もしらぬあふせはたとりかねつゝ(奥ノ注ヨレ)

あふたらは名かたつへき、その名をはなき名にてあると云とも、心かとはゝいかゝすへきとおもふほとにあひかねたる心也

253今のまのわか身にかきる鳥の音を誰うき物とかへり初けん

只今の別にうき事は鳥の音にかきりたる物を」四四たかむかしより歟来つらん、我ほとにかなしきは有ましきと也

254命とて逢みん事もたのまれすうつる心の花のさかりは

更さかりうつろふ人には命あらはともえたのまれぬと也、本歌春ことに花の盛は有りなめと

255白妙の袖のうらなみよる〳〵はもろこし舟やこきかへるらん

此哥如何

256歟くともこやともあはむ道やなき君かつらきの嶺のしら雲

よそにのみ見てやを本哥にする也」

257心からあくかれ初し花の香になを物思ふ春のあけほの

心からあくかれは花に也、猶物思ふは恋の事也、花にあくかるゝ時分、恋をするほとに猶と也

258われのみや後もしのはん梅の花匂ふ軒はの春の夜の月

人はおもひも出すましと也、月やあらぬノ哥をとる歟

259あちきなく何と身にそふ面影そそれともみえぬやみのうつゝにそれともみえぬやみのうつゝとは逢ことは夢うつゝ共なきに、

面影はなにと身にそふそと也」四五

260 思ひ出る心そやかてつきはつる契りし空の入あひの鐘
入会をつく時かならす人かくへきと思ひ出て、やかて入会聞もはてぬに心かつきたるとなり、切なる心也、思ひ出るほともなく心のつきたると云所妙なり

261 あすしらぬ世のはかなさをおもふにも馴ぬ日数そいとゝ悲しき
此哥はなれぬ日数と云所妙也、明日しらぬ命にて有るほとに、此くれをと有へきを日数といふは猶哀也、あすをも知らぬ命に結句物をおもひて日数」を送る哀也

262 をのつから人も泪やしるからん袖よりあまるうたゝねの夢
袖よりあまるとは人を夢に見て夢の内になく涙かあまるを人かしるへきと也、人もとはけんしよの人也

263 命たに有らはあふ瀬を松浦舟かへらぬ浪もよとめとそ思ふ
帰らぬ波もとはわか年なみの邪也、命かあらは若あふ事も有へきと頼むほとに、年もよらすしてよこめとそ思ふと也」四六

264 下ひものゆふ手もたゆきかひもなし忘る草を君やつけけん
草を君やつけゝんとは、下紐かとくれは人かこふるといへ共人はこぬほとに、忘草を人か我下ひもにつけてあるかと也
壬二

265 ぬれは夢さむれはむかふ面影に馴てもよそのの物思へとや
なれてもよそのとはおも影にはなるれ共恋しき程に、よそのは其おもかけノ人を也

266 まてしはし夜ふかき鳥の声す也さても尽せぬ名残り成共」
さても尽せぬとは今ちと逗留したり共名所はつきすましけれは、今ちととゝまれと也

267 ふしのねの煙も猶そ立のほるうへなき物はおもひ成けり
うへなき物とはふしは上なき物なれ共煙か立のほるほとに、上か有る思ひのけふりはふしより猶うへにて有かと云心也

268 濟見かた我かよひちの関なれや打ぬる人も波のよる〳〵
濟見は波の音ありてねられぬ所なれはいへり、人の打ねぬを云り」四七

269 あひにあひて物思ふ比の夕暮に鳴やさ月の山郭公
あひにあひては我物思ふに時鳥打佗る時分也

270 入までに月はなかめつ稲妻の光のまにも物思ふ身の
そとの間にも物思ふ身か終夜月を詠てものをおもふも思ひやれと也、いひのこして面白哥也

271 つくは山やまもあせねと吹風に人の心のひまそつれなき
此しけ山さへあすかほとの風に思ふ人はつれなき心はちともくつろかぬと也、つれなき邪は隙かなきと也」

272 思ひ川影みし月の薄氷かさなる夜半の月もうらめし

影みしは人の事也、そとみたるも今はへたゝりてえみぬ心也、かさなるはうすかりし氷か今はかさなりたる程に、いよ〳〵月かみえすうらめしきと也、月の事也

273 朝霧にしはしやすらへ橋姫の心もしらぬ宇治の川長

橋姫のきぬ〳〵の時分、霧の中を川長か思ふともなく行ほとに、此朝霧の面白にちとやすらひてはしひめをなくさめよと也、又川「四八長を橋姫の所より別る人にしてもいふへきかとなり

274 暮かたき図のうらの春の日にくるしや心あまのたくなわ

春の日は暮かたき物なれはいつも夕を待心也、くり返し〳〵思ふ心也

275 神なひのいはせのもりのいはしたゝ我恋まさる鳥の音もうし

鳥の音はよふこ鳥也、いはせによめり、我恋まさるとはよふこ鳥を聞て猶かなしきと也

276 たらちねの親のいさめにもる山は下の歎の色に恋めや」

親のいさめにもる山とはおやかまほりて人にあはぬ事也、もる山は紅葉をよみたる所なれは色とよめり、恋めやとは色に出ては恋ましと也

277 あまの袖あらそひかねて松嶋や下紅葉する秋そかなしき

海士の袖のぬるゝに松のあらそふ事也、松の下紅葉する比、われも猶かなしきと也

278 逢事はぬるを頼みの夢路までをたえの橋に月かたふきぬ

をたえのはしはたゝたえたる事をいふへき為也、橋に月のかたふく時分かなしかるへきと也」四九

279 名とり川心のとはゝ埋木の下行なみやいかゝこたへん

埋木の下行とは人にはおんみつすへきか心にはいかゝとなり、なき名そと人にはいひてを本哥也

280 くもれけふ入会の鐘も程遠くたのめてかへる春の明ほの

春の日はゆふへかとをけれは、くもりて夕の分別もなきやうにと也

281 我袖にかさぬる月の光さへきぬ〳〵になる明ほのゝ空

衣〻になるは暁は月も入物なれと也

282 よそにみて幾夜に成ぬ久堅の空行月におもふ心は」

空行月のめくり逢までと云本哥也

283 歎かしよかへる袂にまさりけり暮をもまたぬ花の下露

帰るたもとは我きぬ〳〵の時也、我はくれを待て露かふかきか、花は夕をまたね共露は深き程に、我袖をは歎くましきと也、みなきぬ〳〵の朝いふ心也

284 本あらの小萩か露を枕にて夢にも人を宮城のゝ原

夢にも人をみたきと也

285 思ひかね泪にぬるゝ笛竹の忍ひもあへぬ音にそたてぬる」五〇
ぬるゝ笛竹はなくさむやと思ひて、吹笛に泪のかゝる心也、たゝ音にそたてぬると云へきため斗也

286 あま小舟はつかの月の山の端にいさよふまてもみえぬ君哉
廿日の月は夜ふかく出て、それまて待たるなり、海士小舟はつとつゝくるは泊と云心也

287 浅ましやかくてや今は山しろのよとの若こもかりね計に
かりねはかりにとはそとあひたるはかりにてやむへきかと也」

288 忘すやをのかさま〳〵年ふとも浮身はよその知人にせよ
わすれすやとはそなたに御忘なくてと也、うき身はよその知人にとは、御忘なくはよその知人の様に成ともおもひ出て給はれと也、あはれなる哥なり

289 さゝかにのかよひし道も秋風にかき絶にける夕暮の空
かよひし道もとはわか通ひたる道の事也、秋風の時分たえたるは一段かなしかるへし

290 思ひかね詠出たる山のはの月さへ空に遠さかりつゝ」五一
なかめ出たるは月の出る事也

291 つれなさの心くらへも今よりは我身によはる夕暮の空
心くらへは人のつれなきにわれもちから及ぬ事也、思ふまゝとおもひたるもよはりて又待心也

292 朝露の消はともにと契置て帰る草葉の道もうらめし（はかなし）
五文字はきえはといはむため也、御死あらは我も同様にと契たる事也、帰草葉の道もはかなしはさ様にちきりてかへる道の草なり、いかに同やうにとちきる共左様にはなき物なれは」はかなしといへり、偕老同穴とは、人ことに契れともさやうにはなき物也と云へり

293 忘しと立しちかひを今さらに事なしふとも神もゆるすな
ことなしふともとは、忘申間敷と誓文をしたれ共、そのちかひを忘はてゝしらぬかほ（ヲヲ）るとも其ちかひを神は御ゆるしなありそ、御とかめあれと也、ことなしふともはしらぬやうにある共となり

294 大淀の松のちきりはふりぬれと今もかはらす帰る浪哉」五二
まつのちきりは古ぬれとゝは、契りはなくて久古たる也、それをかはらすうらむると也、契りは古ぬれとゝは、思ひは古はてたれとゝ也

295 契りしはいかにととひて詠れは空おほれする春のよの月
人にちきりたるを月にとへは月は分明にもなく、ろう〳〵とある心也、しらぬかほにてと也

296 暮る野も契はかなき秋風に稲妻まねく花薄哉
契はかなきは薄にいなつまの事也、まねきても手にたまらぬ心

也、野もと云もの字にて恋」の歌に成たる也

297 待佗て思ひ絶にし秋のよに誰暁の鴫のはねかき

誰暁のとは暁の鴫の羽かきと云を本哥也、われは思ひ絶たるに、誰暁の鴫のはねかきを聞て人を待らんと也

298 契りしは夢に詠る浮雲の絶てあとなきうつゝ也けり

人のちきりたる詞は、夢にてこぬほとに雲をなかむれは、雲の消て跡なきは人の契りの様なると也、跡もなきかうつゝにてあると也」五三

299 さり共と暮れは待し契さへ雲のはたての賤のをた巻

ちきりてさり共と待ゆふへさへくり返して本のやうにかなしきといふ心歟、又しつのをた巻はくるしきといふ心にて、ちきりたる夕さへくるしきと云心歟、雲のはたてはをたまきの緑歟

300 恋しなむ身の有様もこりぬやと後の世かけてみる夢もかな

のちの世かけむとは、たゝ後の世はかりか、のちの世くるしき事を夢に見たらは、我心もこりぬへきかと也」

301 おくの海やゑそか岩屋の煙たに思へはなひく風は吹らん

思へはなひくとは、風かけふりをおもへはと云心歟、又只我思ひやれはその煙さへと云心歟、ゑそと云は、あらけなきものゝなひくましき物なれ共と也

302 暁のかねて物うき嵐哉月も霜よのみちのさゝ原

鐘をよせたる歟、心は兼厭暁恋の哥歟、下句は別へき道をおもひやりたる歟、かなしき躰也

303 ねてては又おきつの浜も白浪のあかつきかけてたつそ鳴なる

ねてはねへき事もしらぬと也、人にあひたる夜の」五四事也、暁かけては、我はおくへきかたもしらぬに、たつか暁をしらぬかほになくと也、暁かけてはたゝ暁といふ心はかり也、暁かけて霜やをく寛といふも只暁はかり也

304 紅のあさはの野らの露の上にわか歟袖そ人なとかめそ

あさは野に紅よめり、我しく袖とは、あさはのに敗たるほとに、我袖はくれな井なるとちんはうしたる心也、袖の紅をちんはうなり、あさは野名所也、紅のあさは本哥ニ在之」

305 秋風にこぬ人よりも夕暮の雲のはたてのかりの初こゑ

人を待くれに人はこて初鴈をきゝたれは、待人かこぬほとに鴈のこゑかなをかなしきと也

306 忘行古思ひも秋風の吹にし日より物そかなしき

わか思ひは忘る物を、秋風の比又あたら歟なる心なり

307 をのつから菊の垣ねのよるの霜むすふ契りも下そうつろふ

菊に霜をきてうつろふ比、我ちきりも自然にうつろふと也、をのつからとは、我ちきりの自然に」五五うつろふをいへり

308 あし鶴のつはさにならす白妙の波のかけても恋ぬ日そなき

かけても恋と云へき為はかり也

309もろこしも近くみし夜の夢覚てむなしき床に興津白波

夢覚ては何の夢ともなし

310海山としらぬ別の行ゑしれ月もあらしも心さそはゝ

別たる人は海へやらん、山辺やらんしらす、月や嵐はしるへき物也、月や嵐か心をさそはゝ行て行ゑを知れと心にいへり」

311心から我身こす浪立帰り恨てそふる八重のしほかせ

我身こす波とは人の変たる事也、八重の塩かせははう〳〵としたる心也、心から恨てふると也、本哥あまのすむと云哥也

312いかにして忍ひならはん程たにも物や思ふと人にとはれし

忍ひならふたらは能忍ふへけれと、またならはぬほとにみえつへしと也、人にとはれしの文字にこるなり

313心からおもへは人をとはかりに打なけきても過る比かな」五六

人を思へはかやうなる物にてあるとはかり打歎心也

314恨ても心つからの思ひ哉うつろふ花に春の暮かた

うつろふ花に春の暮を恨るも、我おもひの有により、かゝる時分も猶かなしきと也、うつろふ花に春の暮も悲しき物なれと、思ひかなくは是ほとにはかなしかるましきと也

315忘すよ今はの心つくはねのみねのあらしに有明の月

今はの心つくはねのとは、本人にあふて別し事を今おもひ出ていへり、つくはねの嵐に」有明の比かなしきに、むかし人に別し事を思ひ出たる也、旅の恋歟、又只恋にても有へし

316篠原や知らぬ野中のかり枕まつもひとりの秋風そ吹

松もひとりと云にて恋也、此哥は水無瀬殿の哥合に羇中恋也

317さても猶とはれぬ秋の夕は山雲吹風も嶺にみゆらん

みねにみゆらんは、わか物おもふけしきはみゆへきをと也

318知れしなおなし袖にはかよふとも誰夕暮と頼む秋かせ」五七

誰夕暮と頼むとは、そなたを待夕暮にてある物を、是ほと待とはしられしなと也

319あらち山やた野の浅茅色付ぬ人の心の嶺の泡雪

人の心の嶺の淡雪とは、人の心のあは〳〵しきを云也、あたなる心を云り、上句みな人のうつろふたるたとへなり

320池にすむをし明かたの空の月袖の氷になく〳〵そ見る

是はひとりねての夜の事歟

321忘しの心の色や秋かせのふきと吹ぬるむさし野の原」

此歌は人のこと〳〵しくうつろひたることをいへり、本歌有り

322とはれむとさしてはすます松の門見はてんための秋の夕暮

山家の恋なとかみはてんためとは、此山家にゐて人の心を見はつへきと也、さしてはと云ほとにちとは待心あり

323今日斗待みんとても月日へぬ軒はの杉の夕暮の空

えんを尋恋也、けふはかり〳〵と年を送たる心也、いかに待みんを本哥也」五八

324 木かくれに身はうつせみの思ひ佗うかるゝ玉やほたるなからん

空蟬とは、我玉しゐはうかれてわか身はからの心也

325 山人の手引のかつらくり返し頼む爪木のゆふかひもなし

手引のつま木ゆふ物なれは、たゝいふかひもなしとはかり也

326 うき人を音にもきかし玉かつらたゆ共吹な秋の山風

中かたえては、うき人なれは音にもきゝ度もなきと也

327 見すもあらぬなかめ斗の夕暮をことありかほになに歟らん」

みたる程にもなき人をこと有かほになと歟そと也、ことありかほとは一段思ふ事也、なかめはかりとはあやなくけふやといふやうに我物を思ふ事也、

拾玉

328 うれしさに有らぬ物故忍ふとて涙を袖につゝみつる哉

うれしさをなにゝつゝまん唐衣を本哥にして、うれしさにあらぬ物ゆへ忍ふとは、うれしさをつゝめともそれにあらぬ忍ふ泪を袖につゝむと云心也

329 くるしさはをとらし物をあなかちにいとふ心もこふる心も」五九

君のいやとおもへるも、又わかこふる心もくるしさはをとるまいと云心也

330 夕ま暮露をは袖の物にして我恋種に秋風そふく（前ニ注アリ）

たゝ恋の色のかわりたる心也

331 茂りあはん末をもしらす恋種の宿のまかきにめくみ初ぬる

初の恋の心也、そとみて後は恋かつもらんと云心也

332 我恋は忍の岡に秋くれてほに出やらぬしのゝをすゝき

名所しのゝを薄はほに出ぬといへり、忍恋ノ心

333 はゝ木〻のよそにのみやと思ひつゝ幾夜ふせ屋に身をまかすみん」（前にもアリ）

そのはゝ木〻をよそにみておもふと云心、みをまかす寛はよそなからみて思ふ心、その原の哥を本哥なり

334 時しもあれすみた河原の都鳥むかしの人の心しれとや

名にしおはゝいさことはむ、是を本歌にして哀をみやこ鳥か知れと鳴やうなる也

335 箒鷹の恋てふことをよそにみし老の波とそ立帰けれ（前にも注アリ）

はし鷹の木居と云事、鷹の道にあり、老後初恋と云題にてよめり、若時は恋をせすしていま」六〇するほとに老の帰と云也

336 人知れす尋てそ行いもせ川恋わたるへき橋はありやと

岩橋のよるの契りも是らの心にて、よこに橋を渡は恋のあふと云事有、それにたとへてはしを尋とよめり

337 故郷を片敷袖も露けきを今夜いつこの旅ねなるらん

古郷にて泪をこほして旅たちたる人をおもひやる心也

338 前にも注アリ うらうへのいもに心そ隙もなきよかるゝ今夜身にはよかれて」

うらうへうらおもての有人を云、又二道なるをも云、いもい(ママ)女也、女を二人男か持てあなたへゆかん、こなたへゆかんと思ふによかるゝと云心、夜かるゝことよひ身にはよかれてと云は、二人おとこは女によかれ、女又おとこに夜かるゝと云心也

339 鷲の山法の廷にとひきかん恋わふる身のむくひありやと

何のむくひそそれをとはんと云心也

340 恋しなむ後を思ふも哀也なかむる空の行末の雲

我身もあの雲のやうに消うすへきと云心」六一

341 恋佗ぬ身は山のはにかくしてん心よいかに夢のかよひち

山へこもらすれ共心かこもらて夢をみせんと云心

342 袂まてかけてそいのる神風やみもすそ川の末の白波

浪と云なみたの心、神に祈恋の心

343 君こふる人のきけかし寢ふる籬の竹の音はかりたに

寢のふる音のやうにわか恋君をおもふはきかせ度と也

344 心こそ行ゑもしらね三輪の山杉の木すゑの夕暮の空」

尋恋と云題、此哥前に有、年ふともたつぬる人もと云歌也

345 暁の泪やせめてたくふらん袖に落くる鐘の音かな

と云はせつにと云心、鐘か袖にきこゆる程に泪とおなしやうに袖に落と云心也

346 みせはやな夜床につもる塵をのみあらましことに払ふけしきを

せつにと云心、こよひも君の御出候はんかとぬる所を打はらふてぬれ共、御出なき心也、それをみせ度也

347 おろかにも思ひやる哉君ももしひとりや今夜月をみるらん」六二

今夜こなたも月を見、又あなたも月を御覧すらんとおもへ共、いや〳〵あなたにはよそ人と月を見てあそひ候らんまゝ、我おもふはおろかと云心也

348 前ノ注恋也 思ひかぬる夜半の袂に風更て泪の川に千鳥鳴也

おもひかねいもかりゆけは冬のよの本哥にして、思ひかぬる夜半の袂に風更て泪の川に千鳥鳴なり、哥の心は我なみたのようある時分、其辺に千鳥かなくほとに」わかなみた川に鳴と云心

349 露ふかき哀をおもへきり〳〵す枕の下の秋の夕暮

まくらの下はたゝ枕の辺也

350 其人とわきて待らんつまよりも哀は深き波の上哉

遊女の事、舟にある女のこと也、妻をはさためすして雖をも待心也

351 思ひねの夢をかた敷床までも猶うらめしき鐘のこゑ哉

鐘か夢をさます心也、鐘かうらめしき心也

352 なをさりにたゝ引うへし篠薄秋より後も露ふかきまて」六三

と云逢みる心、其後も露けきと云心也

353 (一行空白)

空たのめと云は、人と約束をしたる心よりと云縁にて云心なり

354 玉札の跡たになしとなかめつる夕の空に鴈鳴わたる

人のかたからふみのこぬ時分、かりの鳴ねに玉つさつくるかと云心也

355 なかめつる月は板まにもり初て心の宿そ荒はしめける

心のあるゝと云は、わかおもふに人の心かちかふ心、板」にもるによそへてあるゝといへり

356 帰るさの月そかなしきまとろまてやかて有明を眺しよりも

人を待て宵より暁まて待て有明を見るよりも、別時の有明かかなしきと也

357 帰るさのなくさめたにも有なまし別し人の別なりせは

やうきひの馬嵬かはらにてむなしく成給ふをもまほろしと云心か、母てしるしのかんさしを執にかへりたるまゝ後になくさめは有し也、我は別て後官伝もなきといふ心也、」六四母行まほろしもかな

358 わか恋は庭のむら荻うら枯て人をも身をも秋の夕暮

我恋をする時分、荻か枯て有ほとにわれもかれてあきたると云心なり

359 空たのめ今は恨し君故に心にすむは更る夜の月

そらたのめと云は、人の約束してこぬ心、君は御出もなくて月を更るまてみるも、君故おもしろき月をもみる程にうらむましきと云心也、月やあらぬや是を本歌にして」

360 なくさむる時こそなけれ月やあらぬ秋や昔の荻の上かせ

なくさむる時もなく、荻の風もむかしのやうになきと也

361 とにかくにうき数かくや我ならんしちのはしかき鴫の羽かき

と云は、鴫のはねのおほき事をしちのはしかきと云は、車にのる時ふまゆる木を云、其にかきつけて百数をかく心、それをしちのはしかきと云也、それともかくもあれ、わかうき数をかくなり」六五

風ふけは興津しら波、是を本哥にして

362 竜田山夜半にや君かひとりとてねしよの夢の行ゑをそしる

わかひとりねてむかし夜半にやと云こゝろを今しると云心なり

363 なかむれは晴す時雨の袂哉月より落るわか涙かは

月より落ると云は、月をなかむれはなみたかつようたもとに有ほとに、月より落ると云、時雨といふも泪のつようある心

364 恨しは物も思はぬ身也けりつれなかりしそ今は恋しき」

あひたれはいよ〳〵物を思ふ程に、前にうらみたは物を思はぬ

ほとにて有と云心也

365 打返しあふとみつるをうつゝにてさむる思ひを夢になさはや
あふと夢にみるをうつゝにして、又うつゝのやうに逢を夢になしたきと云心、その心にて打返しといへり

長秋

366 ちらはちれいはせの森の木からしに伝やせまし思ふ言のは（前にも注在恋ナリ）
ちらはちれと云はわか忍事か、もらはもれよと云心也」六六

367 いとふへきこはまほろしの世中をあなあさましの恋のすさひや
此世はてんくわうて□ろと云て、夢まほろしのやうと云、其やうになにとて恋に辛労をするかと云心

368 うき身をは我たにいとふいとへたゝそをたにおなし心と思はん
わか身をいとふと、君のこなたの身を御いとひしと、おなし心ならはせめてと也

369 思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜もおなし丸ねせんとは
かきつめてと云は物をなわにてしかとゆふ心也」
千はやふる宇治の橋守刷をしそ哀とは思ふ年のへぬれは
是を本哥にして

370 年もへぬ宇治の橋守君ならは哀もいまはかけまし物を
とよめり、橋守と云物はうちへ哀をかくるものなり、わか君のその橋守の様ならは哀をかけんと云心也

371 ふかゝらぬ沢の蛍の思ひさへ身よりあまるは哀ならすや
ほたるはちいさけれとも、光おほきなる物なり、それよりも我恋は大なると也」六七

372 あはてこし道の露にもまさりけり衣〳〵に成しのゝめの空
篠わけしあさの袖よりもと云哥を本歌にしてなり

373 夢にこそ都の事もみるへきに袖に浪こすちかの塩かま
袖に波こすと云、ねられぬ心也

374 忘るなとちきりし宿はいかゝあらん野にも山にも面影そ立
旅の恋也、旅立ての山をあるくにも面影かあるか、故郷には何とおもふと云心也
足引の山より出る月待と人にはいひて君をこそまて」
と云を本哥にて

375 月待といひなされつる宵のまの心の色を袖にみえつる
とよめり

376 哀ととふ人のなとなかるらん物思ふ宿の荻の上風
此とふはわか思ふ君の事也

377 我思ふいもかり行て郭公ね覚の袖の哀つたへよ
ねさめの袖の哀、涙の有心をいもにつたへよと云心なり

378 たのめぬに君くやと待宵のまのふけゆかてたゝ明なましかは」六八（前にも注アリ）
君を待こそふくるもくるしからぬに、またぬ時は宵なから暁に

なれと也

379人しれぬ泪にむせふ夕暮は引かつきてそ打ふされける

よきなときて打ふしたるさま也

380物思へとかゝらぬ人も有物を哀成ける身のちきり哉（前ニも注アリ）

かゝらぬ人も、かうない人もと也

381袖の上のよそめ知られし折まてはみさほなりつる我涙哉

すこしある涙はつゝめとも、今は泪かおほきと云心也、夕暮ならぬ折もわかれねと云は夕暮也」

拾遺

382つらきさへ君か為にそなけかるゝむくひにかゝる恋もする哉（前ニも注在）

君のあまりにつらき時思ふ事は、たゝわかかりし時人につらくあたりし、其むくひと云

383忘すやさは忘けり我心夢になせとそいひて別し（前ニも注アリ前ノ恋也）

君にわかるゝ時は夢になせと御申たれ共忘ぬと云心也

384布引の滝より外にぬきみたりまなく玉散る床の上哉

玉ちる床とは泪の有心、本哥あり」六九

385うつる也よしさてさらはなからへよさのみあたなる君か名もおし

君の人に御うつり候ほとにさらはまうその人まてにてよそへは御うつり候そ、君のあたなる名かおしきと云心也

386時のまの袖の中にもまきるやとかよふ心に身をたくへはや（前ニも注アリ）

あかさりし袖の中にや入にけん我玉しゐのなきこゝちする　是を本哥にして我心か君の袖の中へ入ほとに、其に身をまきらはして我身を入度と也」

387須磨の海士の袖に吹こす塩風のなるなとはすれと手にもたまらす

是も本哥有なり、なるれ共見てはちや〳〵といぬる心也

388恋佗ぬ花ちるみねに宿からん疵し袖やさてもまかふと

君の空たきなとの様に、花の香のある程にまきらかさんと也

389忘はや松風さむき波の上にけふしのへともちきらぬ物を（前ニも注アリ）

けふ忍へともちきらぬ物を、遊女人は誰ともなく待と云心」七〇

390影きよき雲井の月を詠つゝさてもへぬへき此世斗を（前ニも注アリ）

と云心、此おもしろきになにとて恋をして辛労をするそと云心なり

391名とり川いかにせんともまたしらす思へは人を恨つる哉

なとり川瀬〻の埋木あらはれていかにせよとかあひみそめけん

是を本哥にして、此名とりと云は名の立事もしらて思へはやかてうらむるといふ心也

392面影はをしへし宿に先立てこたへぬ風の松に吹こゑ」（前ニも注アリ）

尋恋と云題にてよめり、わが宿へ尋とへといひたる人の面影斗にて、松か待てゐたる様にこたゆると云、祈ちきりははつると云心

393 風つらき本あらの小萩袖にみて更行夜半におもるしら露
宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待こと君をこそまて　是を本哥にしてよめり、おもるしら露泪の心也
394 かはれたゝ別る道の野への露命にむかふ物もおもはし
露は消やすき物なれは、身か命も露にかわりて」七二きえはと云心也、消たらは物も思ふましきといふ心也
395 しらさりし夜深き風の音もにす手枕うとき秋のこなたは（前にも注アリ）
むかしあひたる時よふかき、おもしろかりつるも、今はあかれてはそれにぬと云心也
396 恋初し思ひの妻の色身（ママ）にしむ春の花の面影
花の面影と云は君の面影に見ると云心也
397 忘れすは馴し袖もや氷るらんねぬよの床の霜のさ莚
旅にて古郷の人のことをおもふて其人わすれす」はわか袖のことくあらむと也
398 松かねを磯への波のうつたへにあらはれぬへき袖の上哉
此うつたへと云は、たゝうつと云心也
399 尋（ママ）つるつらき心の奥の海よ垣ひのかたのいふかひもなし
つらき心のおくをえみぬと云心也
400 暮る夜は衛士のたく火をそれとみよ室の八嶋も都ならねは
る中室の八嶋と云所にいつも煙かたつ、衛士のたく火と云は、大内の火たく人也、其煙我思ひの色にて候と云心也、其いつも立むろの八嶋かて」七二いなけれともといふ心
401 白玉のをたえの橋の名もつらしくたけて落る袖の泪に
しら玉のくたけて落る袖のやうなると也、を給（絶）のはし名所
402 かたみこそあたの大野の萩の露移ふ色はいふかひもなし
あたの大野名所、うつろふ色と云は、君の心のかはりたる心
403 槙の葉の深きをすての山に生る苔の下まて猶やうらみん
をすての山名所、苔の下と云は、死たる後まて」もうらみんと云心
404 今日そ思ふいかなる月日ふしのねの嶺に煙の立はしめけん
初恋のこゝろ、冨士の煙にたとへてけふ立はしめたると云心
405 いかにせん浪こそ袖にちる玉の数にもあらぬしつの小手巻
いやしき身なれは、君の御なひき候はぬと云心
406 石はしる滝ある花を契りにてさそふもつらし春の山かせ
花と云は君のこと、よそにみて人さそふもつらいと云心、石はしる滝なくもかな桜花と云歌を本歌」七三なり
407 植をける垣ねかくれの小篠原しられぬ恋はうきふしもなし
垣ねかくれのをさゝはらは忍恋、さゝもわか忍恋も同と也
408 名とり川心のとはんことの葉もしらぬあふ瀬はわたりかねつゝ
川をわたると云はあふ事を云へり、此名取川名の立といふ心、

人にはかくせとも心のとはんかかなしきと也、なき名そと人にはいひてありぬへし心のとはゝいかゝこたへん　名とり川瀬〻の埋木あら」はれはいかにせんとはあひみそめけん　此両首本哥也

409命とてあひみん事も頼まれす移心の花のさかりは
春毎に花のさかりはありなめとあひみんことは命也けり　今はたゝ我命をやいのらましあらはあふ瀬のありもこそすれ　是を本哥にして花の盛は君也、風のちらす様に人に御うつり候を、命かあらは其ちるをみんと云心

410色かはるみのゝ中山秋こえて又遠さかるあふさかの関」七四
過不会恋によめり、色かはると云は君の御あき候事をいへり、題によく叶へり

411秋の色にさてもかれなて蘆辺こくたなゝしを舟我そつれなき
秋になれはあしはかるれ共われはかくれていく舟とおなし、物にかよふと云心、秋の色にもと云は、君のこなたをあかれたる心

412いこま山いさむるみねにゐる雲のうきて思ひは消日もなし
君かあたり見つゝををらん是を本哥にして雲なかくしそといふほとにいさむるといへり、心雲」のきゆることもなき様にわか恋か有ると云心

413道のへのあたなる露を留とめて行手にけたぬ恋そかなしき
初恋の心、露をけさぬこゝろ

414末までと誰か契りし秋の霜昔かたりの庭の下草
すゑまてとちきりたるは誰ちきりたるそ、霜に草の枯たることく成たると云心

415かけてたに又いかさまにいはみかた猶浪たかき秋のしほかせ
かけてたにと云は涙の袖にある心、猶波たかきと云人のはけしき心」七五

416佗はつる我思ひねの夢路さへ契しられて吹あらしかな
夢に君を見うとすれは、嵐か吹てみせぬ程に、ゆめのちきりもしらぬと云心

417風ふけはさもあらぬ嶺の松もうし恋せん人は都にをすめ
山家恋と云題にて、松風もうらめしき程に、恋する人はみやこか住よからんと云也

418行ゑなき宿はととへは泪のみさ野のわたりの村雨の空
くるしくもふりくる雨かみわか崎、是を本哥にして泪か村雨の様なると也」

419頼む夜の木のまの月も移ひぬ心の秋の色を恨て
たのむと云待夜の心、月もうつろふと云は暁の心、こゝろ〳〵の秋と云は君の心、こなたを御あき歟、御出候はぬかうらむる

と云心

420花のこと人の心の常ならは移ふ後も影はみてまし

花はちりても明年に又さけとも、人のうつろひたるはかけをえみぬと云心

421玉しゐの入にし袖のにほひゆへさもあらぬ花の色そかなしき

本哥わか玉しゐのなき心ちするをとれり」七六

422白妙の袖の浦なみよる〳〵はもろこし舟やこき帰るらん

袖にみなとのさはく哉もろこし舟もよりしはかりにと云本哥にして、つよう涙かある程に大なるもろこし舟も帰程なると云心、

袖浦名所、もろこし舟のよる所也

423我のみや後も忍はん梅花にほふ軒はの春のよの月

月やあらぬ春やむかしの哥を本哥にして、君のことを後も忘まいと云心

424春やりし其くろかみのすちことに打ふす程は面影そ立」

打ふす程と云は、つよう思ふてねたる心

425思ひ出る心そやかてつきはつる契りし空の入会の鐘

人とちきりて待時、いりあひかなるほとに御出候はんと思ふ心に、心かつきはつると云心

426をのつから人も泪やしるからん袖よりあまるうたゝねの夢

袖よりあまると云は、つようなみたのあるまゝを

（三行空白）」七七